

# 思考表出のガイドとしての日本語マニュアル「表す日本語」の再考

A Japanese writing manual as a guide to the proper representation of thoughts

東京外国語大学総合国際学研究院教授

佐野 洋

東京外国語大学 総合国際学研究院 教授 (情報工学)

✉ sano@tufs.ac.jp

☎ 042-330-5367

## 1 文書作成モデル

### 1.1 文書作成モデル

横井の文書作成モデル ([1]: 14 頁) は、認識したり思考したりした内容の表出過程の技法論である。このモデルの解説 ([2]) で示したように、ことばの表出の背後に、意識的な思惟・思考過程があることを前提として、不可逆的な産出過程を認める。そして思惟・思考過程には段階性があり、思惟・思考の内容は、その段階に応じて表層的に特徴づけられる表現形式があるとする。

横井は、特性という特徴を文書に認めて、ビジネス文書が持つ特性には「軽快さ」、「正確さ」、「厳格さ」の3つがあるとする ([1]: 12 頁)。正確さと厳格さは、思惟に関わり思考を律するから、横井は思惟や思考過程と言語による表出行為と結び付けた文書作成モデルを提唱したのである ([3])。[3] から引用して簡略化したライティングプロセスを挙げる (表 1)。

表 1 ライティングプロセスと認識・思考

書き方段階	着想 →	試みる日本語 →	表す日本語 →	伝える日本語 →	訳せる日本語
認識・思考	発想、創造	内観、省察	言明、陳述	主張、見解	転換、共有

なお、右端の訳せる日本語は、表現された内容が X 語に翻訳される表現を表す。翻訳された表現を表す X 語と称し、当該の表現は編集を経て伝える X 語に変わる。

これらの段階性が、母語で考えた内容を X 語に転換する翻訳という包括的な行為を、その営為の中に過程性を仮定し、その内部に立ち入って不可逆的な複数の産出過程に展開できるのである。同時に母語から X 語への表現変換を局所的で管理可能な量の操作として位置付けた。

### 1.2 対象文書と思惟特徴

産業日本語研究会ライティング分科会 (以下、ライティング分科会) は、ライティングプロセスの中の「伝える日本語」と「訳せる日本語」段階における段作文 (パラグラフ・ライティング) の具体的な書き方を議論し、「伝える日本語」から「訳せる日本語」への書き換え規則 (段作文規則) を検討してきた。この段作文に焦点をあてた書き方の整理は、文単位での取り組みと同じように、思考と言語表現の間にある関係を言語の性質として認められる範疇や句や節、さらに文章の部分構造 (連鎖順序や情報の新旧提示の順序など) の変換操作に落とし込もうとする企てである。その課題は、文章構造 (文連鎖) を対象とした具体的な変換操作の提案と整理であった。

#### 1.2.1 文書類型

ライティング分科会ではまず、取り扱う文書領域、ビジネス文書とは何かを議論した。その際、使用分野 (業態や形式) や利用目的 (説明や報告) などの観点から文章の在り方を探った。議論の末、表現内容が相手 (読み手) に対して与える影響に力点を置き、我々はマニュアルが対象とするビジネス文書を、読み手の行動変容に結びつく文書とした ([4]: 34 頁)。

文章を通じ読み手の行動変容に至るには、読み手の持つ信念の変転（知識状態や因果の関係性や因果連鎖の過程変化）が伴う。そしてこの変転を促すための文書表現の表層的な手掛かりには、(1) 話しの道筋とその表し方、(2) 書き手の役割とその叙述法、(3) ものごとの確からしさと表出法の関わりに見出すことができると考えた（[4]：35頁）

### 1.2.2 思惟表出

数年に亘る議論を経てライティング分科会では、段作文における思考と言語表現の関係をより思考表出に近い段階で扱う結論に達した。というのも段作文（パラグラフ・ライティング）の営みにおいては、文や文の連鎖が表す意味においては、思考要素（叙述対象の実体や実在、叙述される思惟（因果）の仕方など）が重要な位置を占めることからだ。

例えば、「日本人のための日本語マニュアル」（[1]）にある「伝える日本語」から「訳せる日本語」への書き換え説明では、表現されている対象を相互参照する際には、対象が未知なのか既知なのか、実体は個物（群）なのか一般物か、恒常的区別なのか相対的区別なのか云々、モノゴトの内実を注意深く参照する（[1]：63頁～66頁）ことを要請する。こうした子細な通釈を経て、上位下位の関係や冠詞、指示詞や代名詞の使い分けができる（変換規則が解釈できる）。

文を連鎖させる技法部分では、「主張し説得する」、「説明し共感を得る」（[1]：71頁）ことについて言及があり、筋書の説明とともに内容の書き換への規則（[1]：81頁～84頁）が挙げられている。よく見ると、これらの書き換えは思惟のやり方の転換に関わる。具体的にモノは、役割や機能を表すモノ間の関係から、動きの主体と被動の対象を明らかにすること、時間や場所に束縛する属性や性質を示すことで、時間順序を固定し因果の関係性の連鎖を続けることなどである。そしてコトは、部分的で確率的な関係性から、分析的で決定的な因関係性への言い換えることなどである。

ここで、段作文（文連鎖）を単位とした思考様式の変換は、品詞といった範疇や句、さらに文章の部分構造（連鎖順序や情報の新旧提示の順序など）の変換操作に還元できないからで、これを変換規則として具現化しようとすると、伝える日本語段階から訳せる日本語段階への表現変換において畢竟込み入った説明にならざるを得な

い。書き換え規則の総覧は全単射のような写像関係にできない。

### 1.2.3 表す日本語における思惟

ライティング分科会では、2019年度の議論から（[1]：25頁～46頁）、モノ見方の二重性の観点（「～がある」と「～である」）が、思考の様式に強い影響を持つことを指摘し、その違いが時間の経過の捉え方を分かちと結論付けた（[3]）。動きは時間経過の中に認めるモノの変化であるから、知覚や認知の対象のモノの捉え方は動きの表象に直に影響する。言語的世界にあって、動きの表象が表す意味は所謂、用言や動詞の意味であり、文章表現にあって叙述の中心をなす要素であるから、必然的に段（パラグラフ）の構造に影響する。

図1に示すように二つのパラグラフの型（共感型と説得型）を提案すると同時に、この表現段階は、表す日本語ステージに適用するべきであると結論付け、ライティングプロセスを変更するに至った（[3]）。

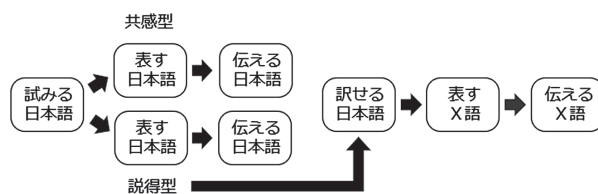


図1 ライティングプロセス（提案）

「表す日本語」の共感型の段と説得型の段は、分科会がそれぞれ共感技法と意志技法として議論した文章類型で、モノの見方の二重性の観点（「～である」と「～がある」）が方向づけている。「～である」は、モノの役割や機能を注視する意味の取り上げ方で、「～がある」は、モノの外形部分に焦点をあてた意味の表現の仕方である（[4]：45頁）。

本稿は、推論方法に注目し、段作文における叙述表現の頭れの違いに着目して、「表す日本語」の位置づけを再検討した報告である。以下、2章では、表す日本語の位置づけについてモノやコトの分節とその意味と思惟方法の関係をとり上げる。3章では、訳せる日本語の表現上の問題点について推論と関係が深いことを、具体例を用いて説明する。4章でモノとコトの実在とその意味の不可分な関係を述べる。

## 2 表す日本語

### 2.1 二つの思惟と表現の型

1.2.3 節で述べたように「伝える日本語」の前段階（「表す日本語」）に立ち戻り、思考と言語表現の関係を扱う。横井（[1]）も「表す日本語」を『思考を精緻化し、記載要件を満たし、情報的的確に表現する』（[1]:14 頁）と位置付けている。この段階は、「思考の形式が表現化され聞き手に分かる」ことが肝要で、言語的に認識されたモノゴトの概念や観念が何であるかと、思惟の仕方の違いに結び付けて詳細化する段階である。

ライティング分科会では、この段階で二つの表現の型（共感型と説得型）があることを指摘し、その特徴を整理した（[5]）。略述すると、共感型は、叙述対象のモノゴトを「である」と意識したり見做したりする表現様式であり、これに対して説得型は、叙述対象のモノゴトを「がある」と思い為したり認めたりする表現様式である。

前者は、モノゴトが一般的である、あるいは時間や場所に依存しない機能的なモノであると視る思考である。叙述の世界は相対空間と離散時間が想像されて、役割実在（機能実在）が複数の複数の時空間内を通貫する。動き（時間経過）はモノの移相で表され、結果状態から、結果を生じさせた原因・理由を時間逆行で見出そうとする帰納的・仮説演繹的な思惟が用いられる。

後者は、モノゴトが知覚経験的である、あるいは時間や場所に束縛された具体的なモノであると極め込む思考である。叙述の世界は絶対空間と連続時間が想起されて、外形実在（幾何実在）が単一の時空間内で位置を占める。動き（時間経過）はモノの移動で表され、原因・理由から時間順行で結果状態を生じさせる演繹的な思惟が用いられる（[4]:38 頁～39 頁）。

### 2.2 状況と表現の表層的な手掛かり

文の意味を表す言葉に換えて分析すると、情報構造（既知－未知）を土台として、共感型は主題－叙述の表現様式を使う。役割語など内包を意味指示に用い、因果の展開には、類例や影響を重用して確率的な推論（帰納や仮説演繹推論）の手段を充てる。説得型は主語－述語の表現様式を使う。輪郭語など外延を意味指示に用い、因果の連鎖には、差異や結果を重視して決定的な推論（演繹

推論）の手段を取る。

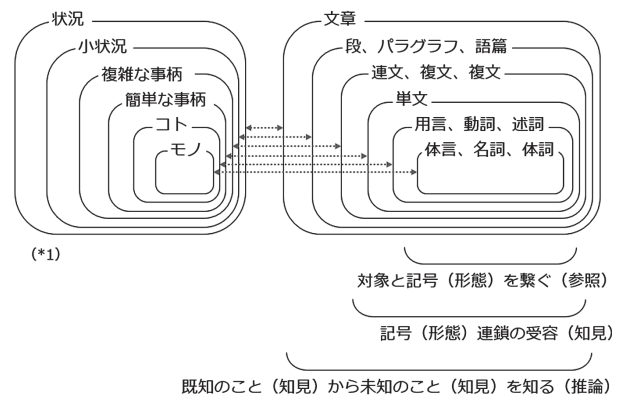


図2 状況の大きさと文章構造の関係

状況の大きさと文章構造の関係を図2に示す。推論が及ぶ表現規模（段やパラグラフ）に至っても、指示の段階における概念・観念の違いが厳然と残るから、言語の性質として認められる品詞といった範疇や句や節、さらに文章の部分構造（連鎖順序など）の文の部分構造の変換操作に頼るだけでは文章を変えられない。

こうしたことから、図1にあるように表す日本語段階において意識して表現を仕分ける必要があると考える。なお、図2の左(\*1)は[4]の22頁にある図2.1を引用し改変した図である。右には一般的な統語範疇との対応を示している。右図下の参照は対象と記号を繋ぐもので、図3（[6]:27 頁から引用）の記号が表すものと記号により作られる意味の関係を指す。知見は叙述内容を表し、知識や信念などに対応する。



図3

推論は、既知の事柄から未知の事柄を知る合理的な思考過程（[7]:39 頁、[8]:30 頁）で、形式的な規則適用の妥当性に基づく推論は指さない。

既知の事柄が真である根拠はないし、人の認知には限界がある。知覚経験する知覚外界や思い巡らす思考内界は、人が認知しているよりも圧倒的に広いはずである。モノゴトは精々確からしいか（[9]）、言語社会の中で大凡一致した見解であるといったものである。

## 2.3 表す日本語再考

推論は因果性（原因と結果の関係）に支えられている。時間順行する推論と時間逆行する推論の区分（[8]：30頁～35頁）に加えて、因果性の捉え方には諸説がある（[10]：1頁～20頁）。

例えば、以下の例を取り上げる。

・“The excessively high amount of user traffic caused the website to crash.”（「ユーザーが過剰に通信を行ったために、そのウェブサイトは機能停止した。」）<sup>1</sup>

「そのウェブサイトが機能停止した」ことは経験世界で知覚の対象となる実在する事柄だが、「ユーザーが過剰に通信を行った」ことは、日頃からデジタル通信網のパケット量を監視する業務をしていないかぎり知覚の対象ではない。なので現実の結果に着目して、ある出来事が当該の出来事を生み出す関係を求めることになる（産出的因果、[10]：12頁）。また、機能停止という結果は、「何らかの閾値を越えることによって生み出される」から、非線形因果（[10]：8頁）であること、時間と場所に束縛された実例としての関係性なので単称因果である（[10]：2頁～7頁）。個別的であって前提条件が強い関係表現である。

日本語訳を「そのウェブサイトは、ユーザーが過剰に通信を行ったために機能停止した。」とすると、主題があることで総合的な解釈に偏り、「ユーザーが過剰に通信を行った」こと以外の原因を比較することを意識させる（類型ベースの因果、[10]：12頁）。類型ベースの因果は、関係性の確率上昇で説明され、ベイズ推定と親和性が高く（[10]：113頁～123頁）、仮説演繹的な（個別から一般を引き出そうとする）思惟でもある。

「表す日本語」は『思考を精緻化し、記載要件を見だし、情報を的確に表現する』段階であるから、この段階において推論の仕方や因果の関係性を意識して表現を仕分けないと伝える日本語として不十分だろう（図1）。

## 3 訳せる日本語と表すX語

本章は、「日本人のための日本語マニュアル」([1])から引用して、訳せる日本語から翻訳された表すX語を、伝えるX語に編集した例（Xは中国語）を挙げて、推論の仕方や因果の関係性の意識化が必要であることを説明する。また、叙述の事柄の説明で用いられているネットワーク図（[1]：22頁）の問題点にも触れる。

説明では「伝える日本語」の文を「訳せる日本語」へ言い換えてX語（中国語）に直訳している。考え方として直訳は、X語として不自然なので、X語を母語とし日本語が堪能な者や、日本語を母語とする者でX語に堪能な者（翻訳者や校閲者など）が編集する。編集し終えた表現を「伝えるX語」と呼ぶ。なお表現の編集は、本学の学生（中国からの留学生と中国語専攻の学生）の協力を得て行った。訳出説明も彼らに負っている。

### 3.1 単純な事柄の表現

単純な事柄の表現例を（[1]：22頁）から引用して示す。なお英語訳は省略している。

訳せる日本語	「昨日電子メールで友人が新聞社に原稿を送った。」
表す中国語	「朋友昨天用电子邮件寄了原稿给报社。」

事柄をモノとコトのネットワークで描いた図を示す（図4、[1]：23頁から引用した）。訳せる日本語段階では、X語に対して概念や観念は等価的に変換できることを仮定している。

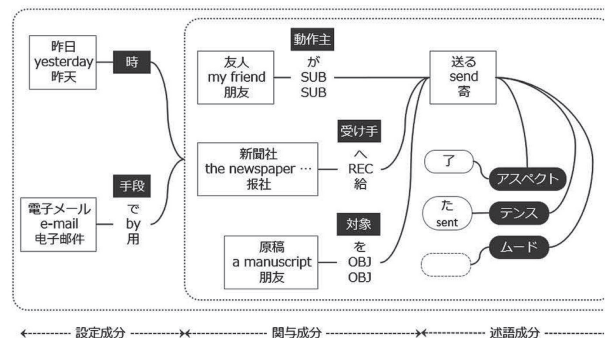


図4 簡単な状況のネットワーク図

1 NISHIYA Koji 著、「The 1,500 Core Vocabulary For The TOEIC Test - Revised Edition-」、成美堂、2020：260頁から引用した。

「表す中国語」は、直訳として意味が分かるが、動詞



の使い方が不適切である。具体的には、手紙を送る場合には「寄」でよいが、「電子メール」の場合、コミュニケーションとして「发邮件」が適切である。

さらに、一般に「～に～を送る」などは介詞「給」を使って「給+人+動詞+目的語」の語順で表す。他にも（英語の send を用いる場合と同じように）「送った結果～のもとに届く」という意味の結果補語的用法で表現するのであれば「送給 / 发给+人」を用いる。また「原稿」には数量表現を用いる（[11]：158 頁）。英語でも“a manuscript”のように不定冠詞が必要なほか、“I'd like to send you an information about …”のように（不加算名詞であっても）不定冠詞が必要となる。

伝える中国語	「朋友昨天用电子邮件给报社发了原稿。」 「朋友昨天用电子邮件发了原稿给报社。」 「朋友昨天用电子邮件把原稿发给报社了。」 「朋友昨天用电子邮件给报社发了一份原稿。」
--------	---

英語では、send のような二重目的語構文を作る動詞では目的語の交替が可能である。動作の継続時間の長短（モノの受容者への到達度の違い）から目的語を交替させた場合に前置詞句が使われる。ドイツ語の動詞は 2 つの目的語を取る際、異なった格を要求することが多く、人を表す語は与格、モノを表す語は対格になるという。ただし、与格が対格になることもある<sup>2</sup>。この与格と対格の使い分けも、動作の継続時間の長短（モノの到達度の違いやそれに伴う対象のモノの質変化）に関わる。

被動の程度は動作の経過時間の違いとも考えられる。長い時間被動していれば、対象は変化するだろう。さらに対象が「人」であるので、モノの移動変化ではなく、モノの質変化が完了したのか、未完了のままなのかの違いに対応している。この編集過程から分かるように、モノの個別性やコトの動きの時間の継続長に関わっていることが分かる。

### 3.2 複雑な事柄の表現

複雑な事柄の表現例を引用して示す（[1]：28 頁）。なお英語訳は省略している。

2 本学のチェコ語を専攻する学生から説明を受けた。

訳せる日本語	「日本人は外国語が苦手なので、昨日の新聞に掲載された記事のように、その苦手さの克服のために努力しなければならないことを議論してきた。」
表す中国語	「因为日本人不擅长外语，所以像在昨天的报纸上刊登的报道一样，他们一直在讨论为了克服这个弱项不得不努力的事。」

事柄をモノとコトのネットワークで描いた図を示す（図 5、[1]：29 頁から引用した）。なお、状況に関わる成分は以下である。

主題成分	「日本人は」
設定成分	「外国語が苦手なので」、「昨日の新聞に掲載された記事のように」
関与成分	「その苦手さの克服のために努力しなければならないことを」（対格成分）
述語成分	「議論してきた」

ところでネットワーク図の特徴は、空間が一様であってノードで表現されるモノやコトが静的に存在することを前提に、ノードあるいはノード集合が関係性で結ばれることを示す。時間の経過状態は背後に隠される。空間的な事態の特徴把握はできるが時間的な特徴を表現できない。モノやコトは、分節されて表象（記号）化される際、それは空間から取り出されることが本性的に決まっていると考えるのだ。

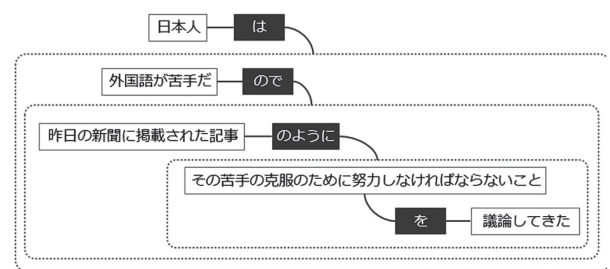
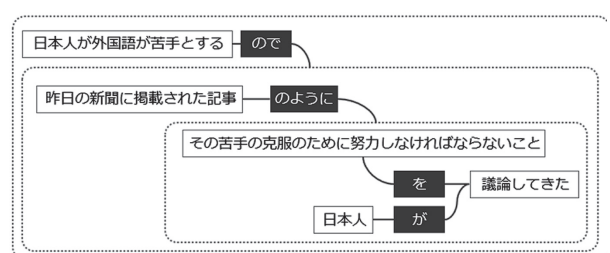


図 5

上の状況図は、主題成分が無くなり動作主成分が追加されて、以下のように訳せる日本語として変換される。



「表す中国語」は、直訳として原文の日本語に沿って二重否定の「不得不努力」を用いる。まず、二重否定は意味上、肯定（「不得不努力」＝「必须努力」）なので簡潔な表現に直す。

「因为」や「所以」は「～ので」よりも強い因果の関係性を表す。上記の表現は、「(出来事 A) が原因で (出来事 B)」という意味になる。ここで「苦手であれば、必ず克服するための努力をする」ことは必然ではないから、削除する。さらに修辞的要素として肯定表現を選択するため、肯定文「必须努力」に変更する。

伝える中国語	<p>「因为日本人不擅长外语，所以就像在昨天的报纸上刊登的报道一样，他们一直在讨论为了克服这个弱项必须要做/必须要努力的事情」</p> <p>「因为日本人不擅长外语，所以就像昨天报纸上报道的那样，讨论了为了克服这种不擅长必须得努力这件事。」</p> <p>「日本人不擅长外语，就如昨天的报纸上所刊登的，他们一直在讨论为了克服这个弱项而应该做的努力。」</p>
--------	---

因果の関係性の強さの認識が表現に関わっていることが分かる。因果性の類型には、幾つかある（[10]：2頁～19頁）。ダグラス・クタッチ（[10]：19頁）に従うと、「～ので」は、類型に基づく確率的な関係で結ばれる関係性（離散の時間経過）であり、「因为」や「所以」は、産出を前提とした決定的な関係性（連続な時間経過）を表すと見做せる。

### 3.3 思考の精緻化段階

前節の最後に挙げた因果の確率的な関係性は、仮説形成と類例（データ）の収集によって関係を強化する帰納法的手段である（[8]：33頁～35頁）。中でも量的帰納（[8]：121頁）は、ベイズ主義統計学の活用によってデータサイエンスの分野でも注目されている方法である。

同じく産出を前提とした決定的な関係性は、原因や理由は規則的に結果を生み出すという演繹法の考えである。因果の関係性は妥当であると見做され、原因や理由で示される出来事は、結果で表される出来事を含意することが多い。帰納的な推論が拡張的推論と呼ばれるのに対して、演繹的な推論は分析的推論と呼ばれる（[8]：11頁）。

時間経過の観点から見ると、帰納的な推論は結果状態

から原因や理由を推定する時間逆行の思惟である。それに対して、演繹的な推論は原因や理由から結果を予測する時間順行の思惟である。これを情報構造に重ねると、帰納的思惟は結果状態が既知で、未知の情報は原因や理由から現状の結果状態に至る関係性の実在の可能性である。演繹的思惟は、原因や理由が既知であり、未知の情報は、この前提の中に含まれている結果の予測である（[8]：32頁）。

出来事の間認められる因果の関係性の強さの認識は、既述のように拡張的推論を基底とするのか、分析的推論に基づくのかによって違っている。思考（思惟の仕方）の意識化は、伝える日本語の段階ではなく、思考を精緻化する「表す日本語」段階で行うべきである（[1]：14頁）。この段階で、思考様式を明示して、その違いを日本語の表現上でも仕分けが必要だ。

ビジネス文書を対象とするマニュアルであるから、思惟の意識化に焦点を当て、思考を精緻化する段階で、「表す日本語」段階で、二つ（共感型と説得型）の表現戦略に応じた概念・観念化と推論の選択を意識するべきだと考える。

## 4 空間と時間のいずれも分節に関わる

### 4.1 「がある」と「である」

1.2.3節で述べた二つのパラグラフの型（共感型と説得型）の区分の背景にあるモノの見方の二重性を、[4]（：43頁）から引用し、説明部分を再掲する。

『その外形に注目して、見て在ることが分かるモノは「～がある」と表現します。知覚を通じた経験や体験を抛り所として、外形特徴を目立たせる意味内容にします。このモノの意味内容で表す動きの表現は、位置変化の様態を表します。説得型の段の書き方の基本です。

その役割に着目して、役目や用途が在ることが分かるモノは「～である」と表現します。認識を通じた経験や体験を抛り所として、役割特徴を際立たせる意味内容にします。このモノの意味内容で表す動きの表現は、質変化の様態を表します。共感型の段の書き方の基本です。』

この二区分は、前者は不動態を前提とする動きを実在化させ、後者は不変性を前提とした動きを表す。動きの製作されるのであり、食パンモデル（[4]：45頁）としてその過程を理解することができる。要するに、モノ



はコトに独立して存在しないし、コトの意味はモノと相補的である。

実在を物理的な物質である視点に立つと外界物質は存在するだろう。けれども人は知覚・認識能力を通じて外界を感じている。人の持つ知覚・認識能力の限界から外界に在るモノは分らない。H. ベルクソン ([12]) は、モノの存在と実在を分け、人がモノを知覚・認識する（実在化）ためには、不動性と不変性を想像することが不可欠だと主張した。モノやコトは分節されて表象（記号）化される際、それは時空間から取り出される（[4]：46 頁～49 頁）。

なお、井筒 ([13]：40 頁～42 頁) によるとイスラーム哲学では分節されたモノやコトはすべて二つの本質（普遍的本質と個体的本質）を認めるという。

## 4.2 照応（先行詞と参照）

記号表象には、一つ一つ当該の記号表象が存在する根拠があり、使用をある範囲内に限定する意味（概念・観念）がある。同一の概念・観念を表す記号表象は、表現形態が違って同一視が可能である。同一視を簡便化する仕組みが照応表現である。

「日本人のための日本語マニュアル」に、モノゴトの参照についての変換規則として『それぞれ先行文脈と後続文脈がどれであるのか、先行文脈と後続文脈の接続関係を読み取り易くし、誤って読み取りが生じないように言い換える。』がある（以下）。

（伝える文章 -2）照応表現

「先行詞と照応詞、それぞれがどれであるのかを読み取り易くし、誤って読み取りが生じないように言い換える。」（[1]：97 頁）

照応詞の種類には、参照する記号表象と同一語形、略称、指示詞と上位概念を表す語の組み合わせ、指示代名詞、ゼロ語形があってそれらを適切に用いることを説明する。

同一の記号表象（同一形態）はもっとも分かり易く、照応の可否が問題にならないはずであるが、ライティング分科会で議論の遡上に挙げた例を挙げる。これは、一人の委員から示された用例で、段（パラグラフ）の文章中で先行する同一語形の意味の解釈が、文章連鎖の中

で変化する例である。『GABA マンツーマン英会話』<sup>3</sup> の広告から引用した。

『勉強だけで、プールは泳げるようになるだろうか。自転車なら、乗って転んでみたり。経験を通し、感覚を掴んでいく。英語もまさに同じ。マンツーマンだからこそ、会話の中で何度でも繰り返し、実践できる。勉強より、体験こそ、勉強です。』

思慮深いコピーライターの記事であるだろうから、誤って読み取りが生じないように十分な推敲が重ねられているはずで、伝える日本語の文章として申し分なく適格である。

1.2.3 節に示したことは、表す日本語段階で、推論が関与する文連鎖まで視野に入れて、思考内容を正確に表しておくとする提案である（図 1 参照）。例えば、共感型を指向し、最後の文を「座学に基づく勉強より、体験に基づく勉強です。」のように記すことで、勉強が表す視点を明らかにする。そして、これを視点の暗示化という伝達上の工夫を経て、伝える日本語に換える。この伝える日本語は、訳せる日本語への書き換え対象にはならないとする。

説得型の表す日本語では、第 1 文を「座学の勉強だけで、プールは泳げるようになるだろうか。」と表現し、先行詞として参照可能にしておくことで、訳せる日本語に変換し易くなるし、その結果として例えば、study と learn で訳し分けられたりするだろう。なお、日本語は視点の揺らぎを内在する（[14]：207 頁～213 頁）。

## 5 おわりに

### 5.1 名実と表現

知り得る六合一知覚経験する知覚外界や思い巡らす思考内界から、意識され分節されて表象（記号）を得たモノゴトが示す意味は、その記号の構造体であることばを使って伝えられる。この分節という営みと名（ことば）で限定された実（意味）を指示する言語的認識には、記号論的視点や哲学的視点からの夥しい数の見解がある（[7]，[6]，[13]，[15]）。

だから、意味の実在にまで踏み込んで日本語マニユア

3 株式会社 GABA。https://secure2.gaba.co.jp/

ルを造り出すことは無謀な企てであって、表現の表層的な手掛かりや気付きで思考結果を表出できる技法論にまとめるのが然るべき手段である。

中でも、文法用語が中心の品詞といった範疇や統語特徴や形態の手掛かりなどを条件部とする書き換えの規則は分かり易い。しかしながら、翻訳という言語知識のみならず文化の違いや地域の事情にまで至るような知識や思考が関わる包括的な行為について、詳細に変換の適用範囲や適用条件を彼らと説明しようとする途端に収拾がつかなくなる。

そこで横井は、思考活動の意識化の視点から、ことばの表出の不可逆的な産出過程を認め（[1]）、各段階に応じて表層的に特徴づけられる表現形式を制限することで、管理可能な変換規則の数と表現品質の管理の可能性を追求した。

## 5.2 表す日本語段階

1.2.2 節で述べたように、ライティング分科会は、段作文における思考と言語表現の関係を表す日本語段階で扱うこととした。段作文の段階においては、文や文の連鎖が表す意味においては、思考要素（叙述対象の実体や実在、叙述される思惟（因果）の仕方など）が重要な位置を占め、とりわけ段作文では、推論過程の占める割合が大きくてモノとコトの実在の捉え方が表現の型を左右する。意味解釈は、文脈によって変化していくので、段作文（パラグラフ）レベルでのモノやコトの解釈の明示化が必要で、その意識化された表現規約が適用されるのが表す日本語の段階であると考えている。

この段階にある文章、つまり文連鎖からなる文脈とは、実在の在り方と因果の類型で区分けされると考える。一つは、役割実体のモノとその視点参照、動きは状態（質変化）であり、思惟は帰納推論や仮説演繹推論を使う叙述（共感型）、もう一つは、外形実体のモノとその個別参照、動きは移動（位置変化）であり、思惟は演繹思惟を使う叙述（説得型）である。ライティング分科会は、これら思惟特徴を具体的な表現技法として整理し、書き方マニュアルとして纏める予定である。

## 参考文献

[1] 日本語マニュアルの会, “日本人のための日本語マニュアル (暫定第1版),” 11 2018. [オンラ

イン] .Available: <http://ngc2068.tufs.ac.jp/nihongo/htdocs/>.

- [2] 佐野洋, “文書作成モデルと思考様式、言語表現,” Japio YEAR BOOK 2019, 一般財団法人 日本特許情報機構, 2019.
- [3] 佐野洋, “文書作成モデルと時間経過の二重性、動きの表象,” Japio YEAR BOOK 2020, 一般財団法人 日本特許情報機構, 2020.
- [4] 特許情報研究所, “令和二年度産業 日本語研究会 報告書 「産業日本語」,” 一般財団法人 日本特許情報機構, 2021.
- [5] 特許情報研究所, “令和元年度産業 日本語研究会 報告書 「産業日本語」,” 一般財団法人 日本特許情報機構, 2020.
- [6] ウンベルト・エコ著、谷口伊兵衛訳, 記号論 記号概念の歴史と分析, 而立書房, 1997.
- [7] S.I. ハヤカワ著、大久保忠利訳, 思考と行動における言語 原書第四版, 岩波書店, 1985.
- [8] 米盛裕二, アブダクション 仮説と発見の論理, 勁草書房, 2007.
- [9] イアン・ハッキング著、広田すみれ・元良太訳, 確率の出現, 慶応義塾大学出版会, 2013.
- [10] ダグラス・クタッチ著 相松慎也訳, 現代哲学のキーコンセプト 因果性, 岩波書店, 2019.
- [11] 三宅登之, 中級中国語 読みとく文法, 白水社, 2012.
- [12] アンリ・ベルクソン著、原章二訳, 思考と動き, 平凡社, 2013.
- [13] 井筒俊彦, 意識と本質 精神的東洋を求めて, 岩波文庫:岩波書店, 1991.
- [14] 野矢茂樹, 心と他者, 中公新書, 2012.
- [15] 宮本啓一, インドの「多元論哲学」を読む, 春秋社, 2008.